鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文社会･社会科学編 第２号　2019

三重県高等学校商業科におけるアクティブラーニングモデルの考察

高見　啓一[1]

要旨

学習指導要領の改定に伴い、高等学校商業科にも地域産業を発展させる職業人の育成が求められており、実践的なアクティブラーニングの導入が推進されている。しかし三重県においては、アクティブなビジネスの学びではなくいわゆる「検定対策」に偏重気味の傾向がある。筆者が講師を務める「三重県商業教育研究会マーケティング・ビジネス経済分野指導者育成講座」では、この現状を打破するための、アクティブラーニングモデルを模索している。本稿はその中間報告として執筆するものである。

キーワード

高等学校，商業教育，アクティブラーニング

１．商業科の置かれた状況

1.1　新学習指導要領

高等学校商業科が置かれている最新の状況としては、学習指導要領の改定が大きい。平成 30 年７月に「解説（商業編）」が刊行されたところである。「改定の経緯」では、「生産年齢人口の減少」「グローバル化の進展」「絶え間ない技術革新」などを背景として、激動の時代を生きる力を育むため「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。

解説では商業科の目標として、「商業の見方・考え方を働かせ，実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、ビジネスを通じ、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1) 商業の各分野について体系的・系統的に理解するとともに，関連する技術を身に付けるようにする。(2) ビジネスに関する課題を発見し，職業人に求められる倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する力を養う。(3) 職業人として必要な豊かな人間性を育み、よりよい社会の構築を目指して自ら学び、ビジネスの創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。」と集約されており、従前の指導要領と比較して「実践的・体験的な学習活動」「地域産業」「職業人（必要な資質・人間性）」「自ら学び」「主体的かつ協働的に

[1] 国際人間科学部国際学科

取り組む」といった、いわゆるアクティブラーニングに関わる実践的な学びを志向していることが伺える[(1)]。

具体的な科目に関しても、大学で言うところのゼミに当たる「課題研究」においては、資格取得に関し、職業との関係などに関して「探求する学習活動」を取り入れるよう留意している。マーケティング分野には「マーケティング」に「広告と販売促進」が吸収され、結果として学習内容が増加したほか、新たに「観光ビジネス」が新設科目として加わっている。また、ビジネス経済分野については、「ビジネスマネジメント分野」と大きく模様替えされ、新たに「ビジネス・マネジメント」などの学習が加わっている。これらもアクティブラーニングを前提とした改革であり、地域産業の発展や、職業人になるための実践的・体験的な学びを志向しているといえる。

このように、以下本稿では三重県商業科のマーケティング・ビジネス経済分野におけるアクティブラーニングの現状や今後について模索するが、いわゆる「アクティブラーニング」について一定の定義をしておきたい。ここではアクティブラーニング研究の第一人者である溝上慎一氏の「受動的学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習[(2)]」をアクティブラーニングと捉え、具体的にはグループワークや発表、プロジェクト型学習などの取り組み全般を指す言葉として用いていく。

1.2　地方創生に役立つ商業教育へ

商業高校サイドからの調査・提案として、全国商業高等学校長協会が全国の商業高校にアンケートを取った結果を基にまとめた「地方創生に資する商業教育の在り方について」（平成28年10月）がある。

ここでは全国の商業高校の実態として、「課題研究」や「商品開発」等の授業において、イベントや商品開発といった創意ある企画が行われ、多大な地域活性化・地域貢献が行われていることが明らかにされている。具体的には「クラウドファンディングによる企業支援」「コミュニティバスのラッピング」「地域ブランドの提案・商標登録」「商店街CM制作」「地域映画の制作」「保育・幼稚園・小中学校での文化祭・体育祭・部活指導の支援」「フリーペーパーやマップの作成」「イルミネーション装飾」「ガイド等の観光ビジネス支援」「挨拶運動や雪かきボランティア」などである。

地域からの期待される商業高校像として、主に「人材育成」「地域から求められる学校」「進路実績」「普通科高校との差別化」を通じて、生徒が経済社会で活躍するための様々な資質・能力を備え、地域の活性化など地域貢献できる人材となるよう育成し、進学や就職など生徒の進路希望を高いレベルで実現する学校であるとともに、商業高校が個性化・特色化を図り、地域から求められる学校であること、とまとめられている。

しかしながら、中学生の商業高校への志望動機として挙げられている「専門的な知識や技術が学べる」についての考えは、「簿記」「コンピュータ」を挙げる高校が多く、厳しい見方を

すればこれら以外の内容が見えにくいものと推察されている。(三重県も同様の問題を抱えているといえよう) [3]

1.3　三重産業教育審議会の議論

三重県教育委員会では、社会の変化や国の動き、三重県地方産業教育審議会の審議のまとめを踏まえ、今後の本件における職業教育の方向性として「職業教育の充実・発展のための推進計画」（平成 30 年 3 月）を策定している。

その中で商業教育については、検定関係以外の主な取組内容として、以下のようなものが挙げられている。「地元の経営者等による講演会」「企業見学」「労働関係の法制度や社会保障制度等の知識の習得」「地域の課題を発見・解決するプロジェクト」「小中学生へ経済や金融出前講座の実施」「観光分野で新たに高校生ツーリスト（仮称）や高校生ホテル（仮称）等の取組を推進」「産業界等と連携し、勤労観・職業観を育むインターンシップの充実」「地域・産業界等とコンソーシアムを構築し、QC サークル活動等で学習する機会の充実」「NPO 法人等を設立し、設立に関する手続きや経営活動等を実践する機会の創出」「地域・産業界等と連携し、商品の企画・開発、販売までを実践する機会の充実」「高等教育機関と連携し、会計分野等における高度な調査・研究の推進」「海外留学や海外研修旅行等の推進」。

特に、学習指導要領の改定を受け「観光分野」に力を入れたプロジェクト型の教育が志向されている点は特徴的であり、学科独自の目標項目として、「地域や産業界等と連携した観光分野の取組実践（現状０校→目標４校）」が挙げられている [4]。

1.4　三重県商業科の課題

三重県商業教育研究会がまとめている「三重の商業教育第 53 号」の記録によると、平成 27 年度の全国商業教育指導者研修会報告では、全商協会総務部長中山博之氏が冒頭挨拶で述べた「検定学習中心の商業教育の見直しを行わなければならない。従来型の一斉授業、教師が説明するだけ、知識を伝達するだけの授業ではなく、生徒たちが主体的に学ぶ参加型、体験型、討論型の授業が必要である。」といった提言のほか、文部科学省初等中等教育局自動生徒課産業教育振興室の西村修一教科調査官からの厳しい指摘「簿記・方法処理を教えたからといって商業を教えたことにはならない。」が掲載されている [5]。

同様の指摘は筆者自身も県内商業科の先生方より聞き及ぶところであるが、このような「実務に結びつかない検定一辺倒」からの脱却が大きなテーマとなっている。そこで期待されるのが、商業科４分野における「マーケティング分野」や「ビジネス経済分野」であり、コミュニケーションやプロジェクトを重視したアクティブラーニングである [6]。

しかしながら、これらの分野には目的となる検定が見えにくく（日商販売士などの資格はあるが簿記に比べると圧倒的に知名度が低い）、現代社会の実態を取り扱うことから、

教員の資質に依るところが多くなる点が危惧される。

２．三重県商業教育研究会での研究活動

2.1　研究会のねらい

筆者は「平成 30 年度三重県商業教育研究会マーケティング・ビジネス経済分野指導者育成講座」（以下「研究会」と称する）の講師として、三重県内商業科教員を対象に、商業科４分野のうち、マーケティング分野とビジネス経済分野の指導者育成に関わることとなった。

ここでは上記のような背景や課題に応えるため、「マーケティング分野」や「ビジネス経済分野」に関する三重の商業教育のよりどころを作り、最低限の質を保証するための「ベース（場合によってはツールまで踏み込む）」を作り上げていく方向性を描いている。

具体的には、「実社会（企業・地域）とつながる学びをどうコーディネートするか」「出口となる地域の企業・大学側のニーズは何か（検定との関係、高大接続との関係）」「検討すべきリソースは何か」「商業教育のあり方の『手引き化』」といったものを探っていくこととした。

メンバーは県内商業科の若手教員８名が受講者として名を連ねた。「育成講座」というタイトルが付されているため、便宜上「講師」と「受講者」という名称になるが、実態としては、ともに研究を行うプロジェクト組織と考えて差し支えないだろう。

2.2　ワークシート①　現在の取り組みや課題

研究会の初顔合わせとなる第１回は平成 30 年５月 14 日（月）に開催され、宿題として図１の「ワークシート①」を持ち寄った。ここでは、目下の課題である「検定以外の学習内容」について実態を調査すべく、「検定以外で取り組んでいる学習内容」や「検定以外で今後取り組みたい学習内容」、さらには地域の企業や団体との連携についての調査を行った。

ここでは学内で取り組んでいる実習（市場調査、POP づくり、電子商取引など）のほか、学外のビジネスプランコンテストへの出場といった活発な活動が事例として挙げられ、郭教諭の工夫や課題が活発に議論された。

写真１．第１回研究会の様子

平成３０年度

「マーケティング・ビジネス経済分野指導者育成講座」ワークシート

本講座は、三重県のマーケティング・ビジネス経済分野の学習モデルづくりを主たるテーマとしています。そこで、マーケティング・ビジネス経済分野の教育に携わっている先生方、これから携わっていこうとされている先生方の日ごろの不安や悩みなどを共有することで、この分野の強みと弱みを考えていきたいと思います。以下のワークシートへのご記入をお願いいたします。

所属校【　　】
お名前【　　】

１．検定以外で取り組んでいる学習内容について

（取り組んでいる内容）
（指導上の悩み）

２．検定以外で今後取り組みたい学習内容について

（今後取り組みたい学習内容）
（取り組むにあっての悩み）

３．本講座を通してどのようなことを学びたい、知りたいと考えているか

４．地域の企業・団体との連携について各学校でされている工夫や悩みについて

図１．ワークシート①

議論の結果、図２に示す３つの場面が重要であり、これらの点について現場で実践されている工夫や課題などを共有できれば、現場教員が使える資料になるのではないかと結論づけた。

１．生徒の指導上の工夫について【議論で出ていたキーワード】 授業の作り方、座席配置、グループ分けの方法、集中力の持たせ方（話題提供）、評価方法（パフォーマンスの高い生徒に偏りがち）、アイデアが飛び交う授業づくり、経営戦略の事例バリエーション、意見交換の促し、新聞記事の活用、バーチャル株式投資、学生の時間確保、コミュニケーション能力を高める授業、実務家による講話
２．学習のゴールづくり（外部との連携）【議論で出ていたキーワード】 提携先探し、ビジネスプランコンテスト、商品開発、日本政策金融公庫との連携、ソーシャルマーケティング、現場実習、きっかけづくり、ICT の活用、商店街活性化、高大連携、産学連携、実習場所への距離の問題、大会や提携先へ行く費用、企業の利益につなげる
３．継続のための工夫【議論で出ていたキーワード】 科目の持ち手が固定される or 変えられた場合、次年度への発展の難しさ

図２．アクティブラーニングで重要となる３つの場面

そのほか出席者のニーズとして、「研修会（研究会）で冊子をまとめても使われない（眠ってしまうパターンが多かった）」「成果物を作るだけの研修ではなく、アクティブラーニングの実践方法を交換したい」「この研究会自体もパッシブ（やらされ感）ではなくアクティブ（主体的にやりたい）なものにしていきたい」と、過去の研究会の反省を踏まえた積極的な発言が見られた。

2.3　ワークシート②　「３つの場面」での工夫

第２回（平成 30 年７月２日（月））は、上述の３要素に沿ったワークシート②（図３）を持ち寄り、各教員の実践や知っている先進事例などを出し合うこととした。ここから共通項を抽出し、アクティブラーニングのコツをクリアにすることで、「三重のアクティブラーニングモデル」を構築していく足掛かりとしていく。

写真２．第２回研究会の様子

平成３０年度　マーケティング・ビジネス経済分野指導者育成講座
アクティブラーニング実践例　ワークシート

所属校【　　】
お名前【　　】

【アクティブラーニングの実践科目 ※他校での事例の場合は学校名も書いてください】
【アクティブラーニングの実践内容】
【１．生徒の指導上、工夫していること】
【２．学習のゴールづくり（外部との連携）に関して工夫していること】
【３．次期以降の継続のために工夫していること】

何枚ご提出いただいても大丈夫です。ぜひたくさん出してください。

図３．ワークシート②

その結果、「グループの作り方（例：どうメンバーを振り分けるか、どう役割分担させるか）」や「評価方法（業務日誌の活用、フィードバックの仕方）」などに課題や関心が集まっており、以下のような工夫（図４）が見られた。

１．生徒の指導上の工夫について ・グループの人数は４～５人 ・発想力・コミュニケーション力を高めるための多様性を持たせたチーム ・学生の主体的な運営を促す（役割を与える・交代する・ワークの方法を教える等）
２．学習のゴールづくり（外部との連携） ・なんらかのプレゼンテーション（他科目の指導にも生きる） ・学校をよくするもの（学校ＰＲ動画制作・図書館のＰＯＰづくりなど） ・地元企業・お店への協力要請
３．継続のための工夫 ・複数担当による連携・分担・共有 ・卒業生への協力依頼 ・学生からのフィードバック

図４．３つの場面での工夫

2.4　県内商業科教諭へのアンケート調査

上記の内容について県内商業科の実態をさらに幅広く確認すべく、県内商業科教諭にアンケート調査を行うこととなり、研究会にて別紙のアンケートを作成した。アンケートの際に「アクティブラーニング」という名称を用いると答える教諭側のハードルが高まる可能性がある、との研究会メンバーからの意見があり、アクティブラーニングという名称はあえて用いず、商業科における「グループワークの工夫」というタイトルで調査を行った（図５）。

アンケート調査票
商業科における「グループワークの工夫」について

所属校		氏　名			
科目名 （他校での実践例については校名も）					
講座数 単位数	講座 単位	受講 人数	人	担任数（教諭・ 助手等の内訳）	人 （　　）
グループワークの内容					

以下のご質問にお答えください（該当箇所の□を、■もしくは☑にしてください）

Q.グループワークの適切な人数とその理由を教えてください（１つにチェック）

□２人　□３人　□４人　□５人　□６人　□７人　□８人　□９人　□１０人以上

【理由】

Q. グループ分けの際に、性別や学力などの属性の偏りは気にしますか?

□偏りは気にしない（自由に組ませる）　□偏らないよう気を配っている　□その他

【理由】

Q.グループ内の属性の偏りを無くす方法について教えてください（いくつでも）

□性別を基準に恣意的に分ける　□部活動を基準に恣意的に分ける
□友人関係を基準に恣意的に分ける　□能力を基準に恣意的に分ける
□グループは自由に組ませている（恣意的には分けていない）
□その他の方法（　　）

【理由・詳細等】

Q.参加学生の主体的な運営を、全体に促す工夫を教えてください（いくつでも）

□リーダーを定期的に交代させる　□リーダー以外にも役割（係）を置く
□教員からのヒントを極力ひかえる　□グループワークの手法を事前に学ばせる
□その他の方法（　　）

【理由・詳細等】

Q.個人のペーパーテストと異なり、グループワークは生徒評価が難しいという問題があります。
グループワークの評価のための方法や工夫を教えてください（いくつでも）
□業務日誌での評価　□成果物への評価　□プレゼンの評価
□担任以外による評価（具体的に：　　）
□その他の方法（　　）

【理由・詳細等】

Q.グループワークの成果について、なんらかのプレゼンテーションは実施していますか？
□はい　□いいえ

【理由・詳細等】

Q.外部人材（ゲスト・連携企業等）と協力する講義について、招致方法を教えてください（いくつでも）
□特定教員の人脈による招致　□学校として連携をしている相手方を招致
□公的機関等への問い合わせ・紹介で招致　□外部人材との協力はない
□その他の方法（　　）

【理由・詳細等】

Q.グループワークのノウハウを次年度以降へ継続させるための工夫を教えてください（いくつでも）
□複数教員で担当・分担している　□作成データや教材の保管・共有を行っている
□外部人材について特定教員の人脈にとどめず学校として連携する（協定など）
□特に工夫はしていない

【理由・詳細等】

Q.通常の座学で教えている内容と、グループワークとの連動はありますか？（いずれか1つ）
□科目内で座学とワークを両方行い完結させている　□他の科目で学んでいる座学と連動させている
□座学との連動はない

【理由・詳細等】

Q.上記のほか、グループワークを行っていく上での工夫や課題がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。アンケートの結果および分析のまとめは三重県商業教育研究会を通じて皆様にフィードバックさせていただきます。

図５. アンケート調査票

調査の結果、全部で 57 通の回答を得ることができた。その回答結果は表 1 のとおり、自由記述の内容は図 6 のとおりである。アンケート結果については、平成 30 年度三重県商業教育研究大会（平成 30 年 8 月 10 日開催）の講演会にてアンケートの速報値の報告を行うとともに、第 3 回の研究会（平成 30 年 8 月 27 日（月））にてアンケート結果を受けての今後の研究の方向性について議論を行った。

表１. アンケート集計結果（速報値）

アンケート　商業科における「グループワークの工夫について」

アンケート回収枚数　57枚

Q.グループワークの適切な人数とその理由を教えてください（1つにチェック）

	無回答	1人	2人	3人	4人	5人	6人
グループワークの適切な人数	0	0	5	7	26	16	3
%	0%	0%	9%	12%	46%	28%	5%

項目ごとの簡易分析：４～５人が圧倒的に多い。

Q.グループ分けの際に、性別や学力などの属性の偏りは気にしますか？（1つにチェック）

	無回答	気にしない	気を配っている	その他
属性の偏りは気にするか	0	21	28	8
%	0%	37%	49%	14%

項目ごとの簡易分析：偏りを気にする教員と気にしない教員がそれぞれ一定数いる。

Q.グループ内の属性の偏りを無くす方法について教えてください（いくつでも）

	無回答	性別を基準	部活動を基準	友人関係を基準	能力を基準	自由に組ませる	その他
偏りをなくす方法について	2	8	3	17	20	21	11
%	2%	10%	4%	21%	24%	26%	13%

項目ごとの簡易分析：一定数が自由に組ませている。恣意的に分ける場合は友人関係と能力が基準。

Q.参加学生の主体的な運営を、全体に促す工夫を教えてください（いくつでも）

	無回答	リーダー交代制	係を振る	ヒントを控える	手法を学ぶ	その他
参加学生の主体性を促す工夫	1	13	30	20	9	7
%	1%	16%	38%	25%	11%	9%

項目ごとの簡易分析：なんらかの役割（係）の設定、ヒントを控えるという答えが多い。

Q.個人のペーパーテストと異なり、グループワークは生徒評価が難しいという問題があります。
グループワークの評価のための方法や工夫を教えてください（いくつでも）

	無回答	業務日誌	成果物	プレゼン	担任以外	その他
生徒評価の方法	5	28	39	24	8	10
%	4%	25%	34%	21%	7%	9%

項目ごとの簡易分析：成果物への評価を行うケースが多い（レポート等が考えられる）

Q,グループワークの成果について、なんらかのプレゼンテーションは実施していますか？（1つにチェック）

	無回答	はい	いいえ
プレゼンの実施	2	26	29
%	4%	46%	51%

項目ごとの簡易分析：プレゼンの実施については半々（科目特性によるか）。

Q.外部人材（ゲスト・連携企業等）と協力する講義について、招致方法を教えてください（いくつでも）

	無回答	特定教員の人脈	学校として連携	公的機関	外部協力なし	その他
外部人材の招致方法	15	7	14	10	20	0
%	23%	11%	21%	15%	30%	0%

項目ごとの簡易分析：学校としての連携先が一定数ある・公的機関の活用も見られる

Q.グループワークのノウハウを次年度以降へ継続させるための工夫を教えてください（いくつでも）

	無回答	複数教員で分担	データ保管	協定締結	工夫なし
ノウハウの継続のための工夫	5	20	29	2	14
%	7%	29%	41%	3%	20%

項目ごとの簡易分析：学内での共有はできている

Q.通常の座学で教えている内容と、グループワークとの連動はありますか？（いずれか1つ）

	無回答	科目内で完結	他科目と連動	座学と連動なし
座学との連動	4	30	7	16
%	7%	53%	12%	28%

項目ごとの簡易分析：他科目との連動は少なく、科目内で完結させる傾向にある

※小数点未満は四捨五入しているため、合計は必ずしも 100％とならない

自由記述

■グループワークの人数
・割り切れる人数（5人）
・テーブルのスペース（5人）
・一人ひとりの役割分担をはっきりさせることができる。グループ内でペアリングができるから（4人）
・役割分担をしたときに、作業が効率よくできる（リーダー、サブリーダー、PC、庶務など）（4人）
・あまり多い人数だと役割の仕事が減ってしまう（4人）
・話し合いに参加する責任感が持てる人数だと思う（5人）
・あまり人数が多くなりすぎると一人ひとりの責任感が薄れる可能性があるため（4人）
・全員がしっかり仕事ができる人数のため（4人）
・互いの意見を言い、聞くことができる人数だと思われるため（5人）
・動画編集に限って言うと3人が適切ではあるが、一般的なグループワークでは4人だと思います。多すぎるのはまとまらないし少なすぎるのもコミュニケーション力・リーダーシップ性など発揮しづらい気がします。（4人）
・グループ内の全員が意見を出し合ったり作業をしたりするのに適した人数だと思われるため（5人）
・それぞれが役割を持てるよう工夫している（4人）
・多様な意見が出され、また意見をまとめやすく、分担して作業を行うという点からも、4名が最適だから（4人）
・2～3人の一組で活動。個人の意見が反映されやすい。（3人）
・2人は少なすぎる、6人は多すぎる（4人）
・話し合いがしやすく、さまざまな意見が出やすい。多数決になったときに奇数の方がよい（5人）
・3～4人が適切。少なすぎると意見が出ず、多すぎると無駄話が多くなることがある。（4人）
・休憩する生徒が出にくい程度の人数だから（5人）
・PPなどを使用するので、4人で作成や原稿づくりをしたりするのには最適。（4人）
・人任せにならない。意見を述べやすい人数。（4人）
・40人クラスを分けやすい。偶数が良い。多すぎない方が一人ひとり責任感を持って臨める（2人）
・情報処理教室のブロックが5～6人掛けなので、特に人数にこだわりはない（5人）
・グループワークは4人が一番意見も言いあえて、仕事も分担できる。（2人）
・2～4人が適切である。得意な分野を持つ生徒と不得意なそれをもつ生徒を統合させるために、最初は小さなコミュニティから始めます。ともに持ちつもたれつ、会社や社会が成り立っていることを体感させ、次第に大きなコミュニティに発展していくようにするためです（2人）
・多すぎると意見が出にくい。一人ひとりに役割を割り当てられる（4人）
・相談しやすい人数だから（4人）
・教室の広さと、担当者の人数に見合った人数であったため（6人）
・席の近い生徒と、机を動かさずに話をすることができるから（4人）
・理解している生徒と、理解できていない生徒を2人ずつ組ませるとちょうど良いと感じているため（4人）
・理解している生徒と、理解できていない生徒を2人ずつ組ませるとちょうど良いと感じているため（4人）
・チーム編成の規定人数のため（3人）
・1グループの人数は全体の人数を5グループで割った人数。この人数は全体で何グループが適切かを考えたもの。（4人）
・壁新聞を作り、発表する上で適切（6人）
・人数が少ないと考察時意見が偏ってしまう。多い人数になると、人任せになり責任もって取り組まない生徒が出てくる。パワーポイントを使用する際、一か所で集中して作成するとなると多い人数では作業し辛い（5人）
・コミュニケーター　クライアント　メタパーソン　に分かれての実習が多く、実習時間内にすべての役割をしながらフィードバックすることが可能であるため（5人）
・ファシリテーターと書記を置くため、少なすぎると話し合いをする人数が少なくなる（5人）
・人数にこだわりはないが教え合いや助け合いをしている（2人）
・今回、講座受講人数が20人だったこともあり、4人とした。講座の中で、理解度が高い生徒が5名ほどいたため、各班に配置することができちょうどよかった。（4人）
・グループワークを行うに、多すぎず少なすぎない人数だと感じるから（3人）
・多すぎても少なすぎてもグループワークする意味がない（5人）
・一人あたりの話す時間の確保（3人）
・目的によるが、現在は作業内容や発表形態から4名としている（4人）
・グループ分けの責任者1名、2名一組で意見を出し合える（5人）

■属性の偏りは気にするか
・必要だから（気を配っている）
・中心となる生徒を重視している（気にしない）
・テストの点数を基準に、お互いが教え合える状況になるように（気を配っている）

・科目や作業の内容によっては気を配るようにしている（その他）
・座席の並びをグループ化している。自由に組ませるとグループを作れない者が出るので。結果としては入れない場合でもはじめから居場所がある。
・偏らないように気を配りたいが、テーマによっては自由に組ませる場合もある（その他）
・ビジネスプランでは学力だけでよい結果を出すわけではないので無作為でクジで決めた（その他）
・属性の偏りによる（気にしない）
・基本自由に組ませます。組みたい仲間の方が自分の素直な意見を言えますし、きちんとした話し合いや新しい物が生まれる可能性が高いと考えます。（気にしない）
・１人だけ違う性別だと何かと肩身が狭い思いをするのではないかと考えられるため（気を配っている）
・色々な意見を遠慮することなく話が出来るように考えています（気を配っている）
・社会に出てグループで仕事をするときに、仲良しグループで作業することはほとんどない。社会人として会社から指示を受けたメンバーで作業をすることを想定し、グループはこちらで組んでいる。ただ、グループを組む際には、人間関係や属性の偏りがないように、授業担当者・担任とで意見交換をしながら組んでいる。誰かと仕事をすることになっても、相手のことを尊重しながら、自分の意見を反映させられるようになってほしいと考えている。（気を配っている）
・ある程度リーダーシップをとれる生徒を配置しないとグループワークなど成立しない（気を配っている）
・仲のよい生徒ばかりにならないよう、公平にくじにしたりする（気を配っている）
・ペーパーテストなどで図れる学力だけではわからない力がグループ学習では必要であるため。色々な生徒と関わることで様々な力を伸ばすことができるため（気にしない）
・自由な発想があってよいと思うので（気にしない）
・話しやすさを重視（気にしない）
・学力リーダー1人、円滑リーダー1人がチームにいるように決めている。（気を配っている）
・授業をグループで進める場合は、グループづくりがとても重要。事例を話し合わせる場合は、特に関係ないので、クラスの席のままグループを作る（その他）
・機械的に出席順で組みます。合う合わないを意識するよりも、いついかなるときも人間同士物事をどのように解決していくかを考え、実行するようにするためです。（気を配っている）
・卒業までに身につけたい力と本人の希望をもとにわける（その他）
・生徒同士で決める方が会話が弾むから（気にしない）
・アイデアを出すことを目的としているので、偏りは気にしない（気にしない）
・バランスを重視している（気を配っている）
・男女それぞれの意見が欲しいから（気を配っている）
・学力が高い生徒がプレゼン能力が高いとは限らない。柔軟な発想が意外な生徒から出て来ることもある。しかし、仕事を公平に分配できるようなグループにしていく必要はあると思う。（気にしない）
・お互いの精神的な内面を取り扱うことが多いため（気を配っている）
・どの班でもある程度の話し合いが進むようにするため（気を配っている）
・生徒間のコミュニケーションをつけるため自由にしている（気にしない）
・全員の理解度が低いとわからないことだらけになってしまうため（気を配っている）
・グループワークの目的が企画・立案であるため、活発な議論がなされた方がよいと感じるから（気にしない）
・いろんな意見を求める必要性があると思います（気を配っている）
・誰も話さないグループをできるだけなくしたい（気を配っている）
・偏りはきにしないが、こちらで組む（出席番号順）（その他）
・様々な意見をグループで出させたい（気を配っている）
・ある程度引っ張っていける人がいないと、進んでいかない（気を配っている）

■偏りをなくす方法
・学科の枠を取り払っての講座なので、人間関係の把握があまりできていない（自由に組ませている）
・時と場合によって上記の方法を使い分ける（友人関係、能力、自由）
・あまり策略がみえみえになると生徒自身のやる気にも影響するので自由に組ませているようにみせるが事前に考えてはおく（その他）
・場合によっては自由に組ませるときもある（取組時間が短いときなど）（性別、友人関係、能力）
・3つに系列があるので、偏りがないように分けている。その後性別の調整を行っている。（その他）
・グループワークは2学期から行うようにしている。1学期に経営分析の初歩やスピーチ練習などグループワークで必要な基礎的な学習を行い、そのときの成績や人間関係等を考慮し、とくにグループを組むことで属性の偏りをなくすようにしている。（友人関係、能力）
・気の合う者同士の方が意見が言いやすい（自由）
・くじ引きなど（その他）
・中学校に紹介しにいくので緊張しないようにしたいから（自由）
・話しやすさを重視（自由）

・座席の近い生徒同士を教員側の指示でグループを構成。グループ構成に時間をかけない。（その他）
・出席順に組ませる。いろいろな属性が適当に散らばっているから（その他）
・原案を作成した上で、学部学科コース主担の会議で検討し決める（その他）
・プログラミングでシステムを開発するという内容なので能力的なバランスを重視した（能力）
・くじ。誰とでも関係なくグループ学習をしてほしいため（その他）
・友人関係によるプレッシャーは学習面でよい効果が得られるとは思わない。その点は配慮すべきだと思う。（友人関係、自由）
・コミュニケーション能力を基準にして、全員が表現しやすい環境をつくりたいため（能力）
・できるだけ話しやすい雰囲気を作るため（性別、能力）
・生徒間のコミュニケーションをつけるため、自由にしている（自由）
・本校はもともと少人数の学校で友人関係などいろいろと問題もあるため。誰とでも話ができる生徒、異性とは話ができない生徒。と配慮しなければならない生徒も多数いるため（性別、友人関係、能力）
・すべての属性の偏りをなくすことは非常に難しいと感じる。いくつかの属性に絞った上で、その属性の偏りを減らすことは可能だと思う。
・基準を設けることに果たして意味があるのかどうかわからない。（無記入）
・性格。おとなしい一人だけのグループをなくす。（その他）
・属性の偏りをなくす必要性は特に感じない（その他）
・普段いっしょにいない生徒同士を組ませて自由な発想をさせる（友人関係）

■主体的な運営を促す工夫
・リーダーにとっても刺激が必要だから（リーダー交代）
・班活動をはじめたらできるだけ教員から指導（ヒント）はいれず、自分たちで解決する（ヒントを控える）
・役割があると自分も参加しなければという思考になる（係を置く）
・役を与えて責任感を持たせる（係を置く）
・教員がでしゃばりすぎないよう工夫する。ただし、まかせっきりにはしない（係を置く、ヒントを控える）
・何かしらの役割を与えられることで責任感が生まれ、行動に移せるのではないかと考えられるため（係を置く）
・リーダー以外にサブリーダー、ライブラリスタッフ（資料管理・日誌作成）、テクニカルスタッフ（PPT資料作成）を置き、作業の分担をしている。事前に行うケーススタディの中でKJ法、ワールドカフェなどの手法を学んでいる。（係を置く、ヒントを控える、事前学習）
・一人ひとりの役割がハッキリしている方が当人もやりやすい（係を置く）
・授業の終わりに日誌で本日のグループの仕事と自分の仕事を書かせることで自覚を持たせる（係を置く、ヒントを控える）
・生徒に自主性があるので生徒の意見や考え、発想の邪魔にならないようにする（ヒントを控える）
・すべて事細かく教えすぎると生徒が考える要素がなくなるため。疑問があるから考えると思うので、考える要素を残しておく必要がある。（ヒントを控える）
・各グループ内で責任を明確にする（係を置く、ヒントを控える）
・学生の状況をみてその都度教員から助言を与える。ただし助言は最小限にする（その他）
・生徒からの改善案を積極的に取り入れる。用語選手権ルール。（その他）
・仕事をする子としない子がはっきりしてくるから（係を置く）
・一部の権限をのぞいて大部分の権限を委譲する。権限を委譲することで目標に向かって自由な活動が保証されることにより自然と責任感が生まれる。失敗することは多々あるが、次どうするかを一緒に考えていくことにより、より能動的により精度の高い活動へとつながっていく（その他）
・全員の完成時間を設定する。教員もあわせて８人で作業をはじめ、教員が少しずつフェイドアウトする（その他）
・生徒が話しやすい雰囲気づくりを心掛ける（ヒントを控える）
・まったく参加しない生徒を作らないように役割を決めている（リーダー交代、係を置く）
・人に任せればいいとか誰かが勝手にやっているからという考えにならないように、一人ひとりが何らかの役割を担うことで、生徒に合った参加の仕方を考えさせる。事前学習は、どんな参加の仕方があるのか学ぶことができる機会だと思う（係を置く、事前学習）
・普段リーダーシップを取りにくい生徒をリーダーにする。自己改革を目標の１つとしているため（その他）
・立場を経験しないとわからないことがあるため（リーダー交代）
・自分たちでヒントを見つけ、理解できたものが周囲を助けられるように促している（ヒントを控える）
・答えではなく生徒と話をし、ヒントを与えることで、私とは違う考え方をして、その方がわかりやすいという生徒も出て来るので（ヒントを控える）
・いろんな工夫をすることで、チャレンジすることがグループワークを活性化するのではないかと考えます（リーダー交代、係を置く、ヒントを控える、事前学習）
・毎回同じ人にまかせることが多いので、できるだけ全員にさせたい（リーダー交代）
・いろいろな担当を作り、生徒一人ひとりに必ず役割を与え、一度が活躍の場をつくる（係を置く）

■生徒評価の方法
・いろいろな方向からの評価をしている（日誌、成果物、プレゼン）
・相互評価も取り入れている。特にプレゼン。ルーブリック評価（日誌、成果物、プレゼン）
・ルーブリック活用（日誌、プレゼン）
・グループワークの評価は、基本的にグループメンバー均一の評価となる。このためグループのメンバー個々の評価を行うため、個々の単独課題を課したり、業務日誌、ペーパーテストを併用するように心がけている（日誌、成果物、その他（筆記試験を併用））
・他に評価方法が見当たらないため（成果物）
・リーダー性、積極性、コミュニケーション力などいくつかの観点にわけて毎日ひそかにつける（成果物、プレゼン、その他（毎日の取り組みを細かくつける））
・様々な方法で評価につなげるようにしている（日誌、成果物、プレゼン、担任以外の評価（生徒間評価））
・発表中心のグループワークでは評価が主観的になってしまう危険があるため、プレゼン評価では教員・生徒の相互評価を取り入れている。また定期考査期間中に経営分析の基礎についての筆記試験を行っている。（日誌、成果物、プレゼン、その他（筆記試験））
・評価方法を周知しておく必要はある（日誌、成果物、プレゼン）
・学び合うことを評価すると伝えているので、質問している生徒・教えている生徒を巡視してチェックしている（その他）
・PC教室受講生への対応（日誌）
・客観的に評価できるものを提出させる（日誌、成果物）
・1学期は期末試験と、上記（日誌と成果物）の2つを主に成績をつけたが、2学期は3名先生がいるのでそのうちの1名が常に生徒の活動を観察できるように工夫をしたいと考えています（日誌、成果物）
・グループワークはたまに取り入れるだけなので、定期考査により評価している（その他）
・毎時間、ルーブリックによる自己評価と個別の面談による振り返りを行い、期末には毎時のルーブリック評価を元に文章で評価する（その他）
・グループワークを評価対象とはしていない（その他）
・担当の評価および生徒間での評価を行っている（成果物、プレゼン）
・生徒の取り組み態度をどれだけ熱心であったかなどの観点から評価するが、正直点数化は難しい。点数になる材料はたくさんあった方が公平になると思う（日誌、成果物、プレゼン、担任以外（生徒同士））
・班の活動全体はどうしても見ることができないので、活躍をリーダーに評価させる（成果物、プレゼン、その他（リーダーによる評価））
・ルーブリック評価（日誌、成果物）
・プレゼンだけだとサボっている人も評価されるので普段から日誌などを取らせる（日誌）

■プレゼンの実施
・まだそこまでいっていない（いいえ）
・プランの中間、最終段階で（はい）
・グループで調べた成果をみんなの前で発表し、他の人もそれをきき、自分の発表や今後の活動に生かしてもらいたい（はい）
・年度末に下級生へのプレゼンを兼ねて実施している（はい）
・ビジネスプランに必要なので評価のために行う。イベント参加型なので当日の働きがプレゼンの代わり（はい）
・授業時間数が足りない（いいえ）
・プレゼンテーション能力も必要（はい）
・プレゼンの準備や他者からの客観的な意見を評価につなげることができるため（はい）
・生徒間で評価し合えるようにしている（はい）
・2月に伝達プレゼンとして2年制に対して学習成果報告会を実施している。伝達プレゼンを行うことで、3年制は一定の達成感が得られ、2年生は来年度の学習意欲の向上につながっていると考えられる（はい）
・毎時間の最初にそれぞれのグループがこれまでの仕事の進捗状況を全員に報告する機会を設定している（はい）
・グループどとにアイデアの提案など（はい）
・全体への発表を目的としていないため（いいえ）
・現時点では余裕がない（いいえ）
・課題研究の場合はプレゼンテーションを実施している（はい）
・教え合いをするだけなので実施していない（いいえ）
・プレゼンの仕方、伝え方、声の出し方、間の取り方、表現方法も実施することで力がついてくると思う。また、評価の対象とできる。（はい）
・研究した成果を発表してこその課題研究であるから（はい）
・評価しやすいため（はい）
・検定合格を目指している講座のため、そこまでの時間は確保できない（いいえ）

・1学期においてプレゼン力の育成は重点を置いていないため（いいえ）
・現状、プレゼンをするような内容ではない（いいえ）

■外部人材の招致方法
・高校生を対象に事業を行っている企業等と連携（応募をきっかけに）（公的機関等へ問い合わせ）
・ステップワン作業所との連携（学校として連携）
・みなみいせ商会（日本政策金融公庫からの紹介）、毎年参加しているイベントへの参加（教員人脈、学校として連携、公的機関等へ問い合わせ）
・予算・時間とも足りない（協力はない）
・つてがないため（協力はない）
・まなびやのスポンサーである三重銀行に年1回ビジネスマナーとクレジットカードのしくみについて講義をしていただいている（学校として連携）
・市役所と連携して取り組んでいる（公的機関等へ問い合わせ）
・卒業生とか、友人とか、企業のHPからの問い合わせから（教員人脈、公的機関等へ問い合わせ）
・部活動での他校の外部指導者による紹介（学校として連携）
・高大連携事業の対象となっており、年間を通じてお世話になっています（学校として連携）

■ノウハウ継続のための工夫
・複数教員での方が目が行き届きやすい（複数教員）
・担当は2人体制だが、ある程度の年数で代わっている（複数教員、データ共有）
・日誌などは評価のために共通して利用することもある（データ共有）
・成果物などの保存はきちんとして次年度以降、参考作品として拾うする（データ共有）
・担当者2名でできるだけ情報を共有している（データ共有）
・活動の様子を動画で残している（年度末）（複数教員、データ共有）
・特殊な科目であるため、次年度への継続は必要である（複数教員、データ共有）

■座学との連動
・1年次にビジネス基礎→2年次にPCソフトの活用→本科目でのグループワーク（他科目と連動）
・座学・統一講座については基本的な知識を身につけてほしい場合に実施している（科目内で両方実施）
・検定対応で補完してもらう場合はある（ビジネス経済応用）（他科目と連動）
・できるのであればしたいが、動画変種の授業においてはしていない（連動なし）
・他の授業との連携が難しいため（連動なし）
・特定の授業を履修した生徒を対象にしていない（連動なし）
・マーケティングとビジネス実務でインターンシップを絡めて、市場調査などのマーケティング実習を行っている（他科目と連動）
・基本座学を行ってからグループワークを行っている（科目内で両方実施）
・講座における達成目標が、座学による資格取得とグループワークによるプレゼンテーション力向上とあり、その内容は座学で学んできたことの延長としてグループワークを設定している（科目内で両方実施）
・ワークでの気づきと座学とのリンクを重要としている（科目内で両方実施）

■その他工夫や課題
・グループワークに適した活動しやるい教室環境が必要。
・担当者が総入れ替えにならないように各方面に働きかける。
・講義型とグループワークとメリハリをつける。ルールを作る。
・特に動画編集の授業では生徒の性格が表に出やすくもめることが多い。自分が楽しむことも大事ではあるが、それ以上に見てもらう人をいかに満足させるかといった観点で作成することがより大事にはなるので、我が出過ぎないよう常に話し合いは持つようにはした。

図６．アンケートの自由記述欄

集計結果の調査表別のクロス集計はこの時点ではまだ行っていないが、ひとまずのグランドトータルから見える特徴として「４～５人のチームを組ませ、チーム全員に何らかの『役割』を与えている教員が多い」「チーム組みの段階で、教員側が一定のねらいを定めている（偏りに「こだわる派」も「こだわらない派」も同様）」「生徒評価のための何らかのアウトプットは行っている（日誌・成果物・プレゼンなど）」「外部連携については

組織立って行われている」「他科目との連動をしているものは少ない」などの特徴が浮き彫りとなった。

研究会での議論においては、アンケート結果から見える最大の課題として、工夫を行っている科目の傾向として「簿記」「情報分野」「課題研究」に関する回答がほとんどであり、マーケティング分野やビジネス経済分野での工夫が上がってこなかったことである。

すなわち、この分野では現実にアクティブな学びが行われていない（もしくは「座学」のイメージになってしまっている）という現状がうかがえ、さらには研究会の当初から課題となっている「検定対策に走ってしまう」という現状も透けて見えてくる。

「実社会とのリンクをどう作るか」が商業教育として最大のテーマであり、マーケティング・ビジネス経済分野の科目がこのような検定中心の学びを補完（知識の応用）できないか、研究会としての方向性や活動の意義を再度確認する調査結果となった。

３．研究会における今後の計画

上記の実態を受け、マーケティング・ビジネス経済分野におけるアクティブラーニングの素地を創り上げる必要性を感じるところである。そこで、今後の方向性として、研究会として当初の目標どおり「マニュアル（提言）」のようなものを作成していくことを検討した。

写真３. 第３回研究会の様子

すなわち、人数が多めの科目であっても実施可能なアクティブラーニングのあり方を検討し、アンケート結果や先進地事例も基にしながら、以下のポイントについてまとめていく予定である。

①生徒の主体性を促すためのグループ分けや授業運営
　属性の偏りについての留意点、グループ内の係設定の例など
　（例：自由に振り分ける場合のメリット・デメリット）
②生徒評価の指標や方法
　アンケート結果をもとに例示し、留意点を示す
　（例：ルーブリックの有用性と限界）

③上記のポイントを意識した授業の例示

→上記２つのポイントを押さえた代表的な実践例を、商業高校４校より示していく。

（例：市場調査）

このマニュアルは、新人など取組経験のない教諭にとっては実践例を先に読むことで、カリキュラムの参考とできる。またすでにグループワーク実践をしている教諭については、ポイント（留意点）の部分を先に読み、検証材料とすることが可能となる。このような活用方法をイメージし「現場で使えるもの」を制作していく予定である。

合わせて、人数が多めのマーケティング分野の講義でどのようなアクティブラーニングが行われているか、県外先進地調査を行う予定である（現在岐阜県の関市立関商工高校に打診中である。ここでは販売士検定の取得を目指しつつアクティブな学びを生徒に提供しており、金融機関などへの就職者も出している）。

これらを踏まえた報告書を平成 31 年３月に上申予定である。ここまで、本稿はその中間報告として「研究ノート」にまとめさせていただいた。

４．終わりに

本稿の最後に、大学で商業教育（ビジネス教育）を行う一教員の立場から、高等学校商業科の先生方との研究会活動に関わって気づいた点を書いておきたい。それは、「①大学のレベルを超える豊かな実践が見られること」と「②アクティブな高大接続の可能性があること」の２点に集約される。

たとえば豊かな実践として「ビジネスプランコンテストへの応募」や「企業や商店街の活性化提案」などは、鈴鹿大学ビジネスイノベーション研究センターを擁する本学でも積極的に取り組んでいる分野であり、長い歴史を持つ県内商業科でこのような実践が先駆けて実施されていることに敬意を表したい。このような実態を三重県内の大学関係者としてさらに調査・発信していきたいと考える。

もう１つのポイントである高大接続の可能性であるが、商業科からの進学者割合が増加しつつある昨今、大学として学力や検定取得の有無だけでなく、本稿で調査しているようなアクティブな学びの成果を評価し、同様の学び（プロジェクト型学習）に大学進学後も関わりたいと考える生徒と接点を持てるような大学に評価が集まるのではないかと期待する（研究会参加の教諭からは「そのような入試が鈴鹿大学にあればぜひ受けさせたい」とのコメントもいただいている）。その点で、本学で現在検討が進んでいる「プロジェクト型入試」には強く期待したいところである。

注

(1) 文部科学省「高等学校学習指導要領解説　商業編」（平成 30 年 7 月）14 頁
(2) 溝上慎一『アクティブラーニングと授業学習パラダイムの転換』（平成 28 年 12 月 第８刷）東信堂　7 頁
(3) 全国商業高等学校校長協会「地域創生に資する商業教育の在り方について」（平成 28 年 10 月）18 頁、22 頁、31 頁
(4) 三重県教育委員会「職業教育の充実・発展のための推進計画」（平成 30 年 3 月）4 頁
(5) 三重県商業教育研究会主任会「三重の商業教育　第 53 号」（平成 28 年 8 月）155 頁、156 頁
(6) 前掲「地域創生に資する商業教育の在り方について」51 頁には、「各都道府県における改革の実施内容及び検討されている事項」として「マーケティングの必修化」や「アクティブラーニングによる授業など」が挙げられている。

引用文献

・溝上慎一『アクティブラーニングと授業学習パラダイムの転換』（平成 28 年 12 月 第８刷）東信堂
・全国商業高等学校校長協会「地域創生に資する商業教育の在り方について」（平成 28 年 10 月）
・三重県教育委員会「職業教育の充実・発展のための推進計画」（平成 30 年 3 月）
・三重県商業教育研究会主任会「三重の商業教育　第 53 号」（平成 28 年 8 月）

国際人間科学部国際学科　takamik@m.suzuka-iu.ac.jp

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学・社会科学編 第 2 号 2019

Consideration of Active Learning Model in Mie prefecture high school business course

Keiichi TAKAMI